

§ 9 結 論

§90 結果の解釈

§900 仮設の吟味

この調査のはじめに立てた六つの仮設をひとつずつ吟味して行こう。(§001「調査を必要とする理由」を見よ。)

仮設の第1は、日本国民の読み書き能力は世界でもっとも高いもののひとつであるとされてきたが、これは、就学率と一般的な書物の出版率とから支持される、というのである。

これを三つの項目にわけて考えると、まず、1 文盲率がひくいであろう、という仮設は、§602.1 で述べたように、明らかに成立する。

つぎに、2 日本人の読み書き能力を教育レベルによって推測して間違いないであろう、という仮設もある程度認められる (§621.1 を見よ)。

最後に、3 現代の文字言語が、社会生活の通達 (communication) に十分役立っていないであろう、という仮設も成立すると考えられる (§60 を見よ)。

仮設の第2の、国語国字問題を論ずる人たちのいう、「日本国民の現在の読み書き能力は正常な社会生活を営むのに不十分である」という仮設は成立する (§602.0 を見よ)。特に、漢字の書取りの力はいちじるしくひくく、正常な社会生活が要求する漢字の書取りの力は明らかに不十分であるといえる。

仮設の第3は、大衆の mass communication media と専門の communication media) とがひどくかけ離れている、というのであるが、この点については、literacy の定義の性質上特に調べなかった。

仮設の第4は、漢字制限が大衆の読み書きの負担を軽くしたのであるが、というのであるが、この点についても、上とおなじ理由から特に調べなかった。

仮設の第5は、漢字の書取りが、読み書き能力に深い影響を及ぼしている言語的

がかりのうちでも、比較的大きいものであろう、というのであるが、この仮設は明らかに成立する (§§61, 620)。漢字の書取りは、問題のうちでもっとも成績が悪く、しかも、得点の段階も、ほかの問題とくらべて、いっそういちじるしいことが明らかになった。日本国民にとって、文字言語の負担は“漢字の書取り”のうえに大きくかかっているといえる。

仮設の第6は、今までの学校での国語教育が、現代の社会生活を営むのに必要な言語技術を十分に教育していないであろう、というのである。現に学校で国語教育を受けている者、または学校を卒業して間もない者——したがって、当然成績が比較的良好と考えられる者——をふくむ 15~19 歳が、20~24 歳、30~34 歳、35~39 歳、40~44 歳よりも成績が悪いという結果は、この仮設の第6を成立させるかのようであるが、それだけでなく、戦争中の学力低下による影響もあるであろうと考えられる。しかし、たしかなことはわからない。(高等専門学校在学者が中等学校卒業生よりも得点がひくく、大学在学者が高等専門学校卒業生よりも得点がひくいことは、一見戦争の影響かとも思われが、上のそれぞれには、ふたつのあいだに有意差がないからはっきりした結論をひき出すことはできない。)

§901 調査の結果は何をあたえたか

§002 「調査の結果は何をあたえるか」の答はつぎのとおりである。

1 日本国民の読み書き能力の全体の分布構造は J 字型分布と認められる (§601)。(ひとつひとつの読み書き能力の分布構造などは表第 12 に詳しい。)

漢字が読み書き能力に及ぼしている影響は、その読みの力については問題ないが、その書取りの力については、それが読み書き能力ぜんたいに及ぼしている影響は深刻であるといえる (§§61, 620 を見よ)。

2 読み書き能力に影響を及ぼす文化的要因のうち教育的要因がもっとも重大な要因である。

3 義務教育での国語教育の目的は、必ずしも「社会に出て正常な言語生活を営むのに必要な度合および型の能力をあたえる」ことではなかった。15~19 歳の者が 20~44 歳の者より成績が悪いのは、戦争中の学力低下が大きく響いているため、かとも思われるが、そのほかに、「正常な社会生活を営むために必要な度合および型の能力」は学校(義務教育)卒業後めいめいが獲得するものであるためかも知れない。

4 日本国民の文盲率は極めてひくいが、literacy を持つと認められる者の率も極めてひくく、6.2% しかない。再調査の成績は本調査のそれよりもおちるから、日本全国民の実際の能力は、こんどの調査の結果より高いということはある得ない。(なお、§5 「結果の検定」などから見ても、この調査の結果に大してくるいはないであろう。)

5 mass communication media を分析し、その範囲内からだけ得られたテスト資料であるから、「満点」(literacy の限界)が 6.2%にしかすぎないということは、mass communication およびその media が十分に活用されていない証拠である。

6 当用漢字、現代かなづかいによったものでも、成績は 5 で述べたように、十分満足すべき状態とはいえないのである。(問題は、当用漢字、現代かなづかいによって作った。)

以上のほか、こまかい分析によって読み書き能力に影響を及ぼす社会的、文化的要因およびその及ぼしかた、度合を解明することができた。

§91 調査に対する反省

一国の国民を対象とする科学的な「読み書き能力調査」は、世界ではじめての試みである。この試みをかぎられた日時と人数と予算とによってほぼはじめの計画どおりに完成することができた。

この調査は、言語学、国語学、心理学、教育学、社会学、統計学および新聞学の各専門家の共同によっておこなわれ、特に統計学では、はじめて詳しい日本全国の層別を試み、言語学、国語学では、はじめての科学的な、言語社会学的調査を経験した。

さて、この調査を進めるにあたって失敗したことも少なくない。これらを、比較的こまかく以下に述べて、こんごの調査に役立てたいと思う。

1 literacy の概念について、はじめによく検討し、委員の間でよく理解し合っておくことが必要であった。

2 調査の要員は、言語学、国語学、心理学および統計学に重点的に配当されるべきであった。じっさい、調査の進行につれて、そのように整備されて行った。

3 このような実際的な調査は委員会組織でおこなわれると、責任の所在があいまいになるから不適當と考えられる。形式的な組織ではなく、もっと実質的な組織をとるべきであった。委員の顔ぶれも実際に働くことのできる人人をもってしなければならない。また、調査の実施の中心が教育研修所のような機関におかれたことも、こんごの調査には十分考えなければならない。理想的には、このような“大きな頭脳”を必要とする社会・文化調査に応じられるような、各科学の総合研究所が作られるべきである。

4 調査の実施にあたって、公文書のやりとりが極めて不手際であった。書類によらなければ何事も進まない“お役所仕事”がいろいろの障害をあたえた。

5 官庁予算のワクと官庁事務にありがちな遅滞とは、調査の進行をおくらせ、専門委員および助手たちの熱意をにぶらせたことが少なくなかった。予算の編成にあたっては、現場の専門家が加わるのが理想的であった。殊に予算の不足は、各調査地点の臨時調査員を事実上ほとんど無報酬で働かせる結果となり、この点への不満から調査に熱

意を持たず、したがっていい調査ができなかった地点が、少数ながらあったということは考えなければならないことである。

6 新聞語の度数調査は、はじめに、完全な最後の表（全体の語が度数順に並んだ表）まで作るべきであった。テスト語として選ばれたものが、あまり度数の高い語でなかったような例がないでもない。たとえば、「緩和」など、しかし、これは時間的制限のためにやむを得なかった。（完全な最後の表ができあがったのは、ほぼ調査の終るときとおなじであった。）

7 sampling 調査計画は、調査の進行からいって、もっと早くすべきであった。

8 解説書（調査者用）のうち、sampling の部分はもっとわかりやすく、ていねいに書くべきであった。この仕事は調査者にとってほとんど未知のことであり、調査者の指導講習会で質問の集中したのもこの部分であった。

9 結果の検定にあたって、再テストの成績がいったいに本テストのそれよりも悪かったことから考えて、sample の呼び出しにはもっとききめのある方法をとるべきであった。

10 こんどの調査は、表現能力——自分が人に伝えたいと思うことをコトバにあらわす能力——については全然考えなかったが、なんらかの科学的な調査方法を考えて実施すべきであると思う。

11 戦争中の学力低下がこんどの調査の成績にかなり影響していると考えられるが、われわれの調査では、特に戦争中の学力低下を分析できるようには計画しなかった。新しい計画によって調べるべきである。

12 問の数は全部で100にすべきであった。計算のとき、100点満点に直す仕事が一とつふえ、また、得点表にいつも90点満点か100点満点かを注意書きしなければならなかった。

13 不注意によって、「当用漢字」以外の文字が入っていた。問題（八）の第2問の「貫」という字がそれである。

14 「現代かなづかい」によって問題を作り、しかも、これによってさえ国民の読み書き能力は満足すべき状態でない、と述べた（§901を見よ）。このことは独断ではなかったろうか。「歴史かなづかい」による問題をも作って、現在どちらが読みやすいとされているかを検定すべきであった。もちろん、結果に大きくなるいは起こらないであろうとは想像される。

15 問題（三）、（四）で、問の見出しに「×」を使ったのはよくなかった。正答語のチェックにこのしるしを使ったものが少なくなかったからである。

16 漢字の書取りの問題のワクの大きさは、そこへ入れる字数にかかわらず、お

なじであるべきであった。吟味調査のときにはこれを考慮した。

17 文字生活の実態調査は、本格的な sampling によって、1,000 人ぐらいの sample を調べるべきであった。このようにすれば、この調査の収穫はもっと大きかったであろう。

18 妥当性を検査する吟味調査は、sample さんの数も少なく、時間も本調査が終わったのちであったが、本調査のまえに、もっと多くの sample さんについて調べるべきであった。

19 答案用紙など書類の回収は、九州の三納村のように、連絡が悪いため 2 カ月以上かかったところがある。回収を早くするための手段をあらかじめとるべきであった。

20 調査員の報告は、あらかじめ項目をきめておいて、記入させるという方法をできるだけとるべきであった。実施状況の分析 (§450.1) は整理に予想以上の手間がかかった。

21 調査の運営に関する各部の記録が不十分であった。調査そのものがいそがしくて、記録がとれなかったためであるが、こんごはこの点にも注意を払うべきである。

22 問題もれに対してもっと注意をはらうべきであった。

§92 提 案

日本では、義務教育がよく普及し、就学率も極めて高く、国民教育のために払った努力も従来極めて大きなものであった。このために、まったく字の読み書きができないという者は極めて少ないのであるが、それにもかかわらず、「正常な社会生活を営むのにどうしても必要な文字言語を理解する能力」は決して高いとはいえない。literacy を持つといえる者は 6.2% にすぎない。学歴でいえば、高等専門学校を出なければ十分ではないということになる。読み書き能力に影響を及ぼす文化的要因のうち、教育的要因がもっともいちじるしかった。学校へさえ行けば、しかも長く行けば行くほど読み書き能力は高まるのである。しかもその能力は年をとってもおちない。

したがって、literacy を持つ者をもっと多くするためのひとつの方法として、国民ぜんたいに長い（高い）学校教育を受けさせる、ということが考えられる。そのためには個人の環境いかんによって長い、あるいはみじかい教育を受ける、という状態を改めて、国家の手による平等なしかも高い教育がおこなわれるようにするべきであろう。しかし、今のところ日本および日本人は、すべての国民に 14~15 年にわたる長い学校生活を許すほど富んでいないと思われる。

それならば、どのような方法によって国民の読み書き能力をひきあげるべきであろうか。

考えてみるに、「望ましい限界の能力」を持つ者をもっとふやすためにはつぎのふた

つの方法しか残されていない。

すなわち、

1 国語教育の技術を改めるか。

2 文字言語そのものを改めるか。

読み書き能力に影響を及ぼす言語的手がかりのうち、もっとも重大なのは漢字の書取りであった。では、漢字をもっぱら読むものにして書くものとしては使わないということによって、国民の読み書き能力をひきあげることができるであろうか。しかし、これは空理としか考えられない。

そうならば、国語教育の技術を改めるのには、特に漢字の書取りの力の養成について深い考慮を払うべきである。しかし、その書取りの力の養成のためのいい方法の発見は、不可能ということできないにしても、技術的に非常に困難な問題である。しかも、国語教育にさかれる時間にも一定の限界があるであろう。

また、文字言語そのものを改めるためにはどうすればいいであろうか。それには、新しい文字（カナモジまたはローマ字）を国字として採用しないかぎり、当用漢字をもっと合理的に決定し、または、漢字の用法を合理化すべきであろう。しかし、この方法が本当にいい方法であるか、すなわち、国民の読み書き能力をあげるための効果ある方法であるかどうかは、別に計画したテストで検討しなければならない。ここではただ、この方法がひとつの大きい可能性を持っているということにとどめる。

さて、このような「読み書き能力調査」は国勢調査のように、あるいは国勢調査といっしょに、数年おきに実施されることが望ましい。国民の「読み書き能力」を時々診断して適宜治療をほどこさなければならないからである。

また、「読み書き能力」を、こんどの調査のように、団体調査で、しかも、問題に筆答させるという方法をとるかわりに、もっとダイナミック（動的）に「読み書き能力」をつかむような計画も立てるべきであろう。